

①《特集》届け市民の声 政治と市民活動最前線

- ⑪《うおろ君の気にな～るゼミナール》
「私のトリセツ」って？
谷川 耕一（社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 事務局長）
- ⑫《実録・市民活動「私のいちばん長い日」》
四半世紀の知らぬふり
堀田 力（弁護士、公益財団法人さわやか福祉財団 会長）
- ⑬《熊本地震災害・熊本発～現地から伝える「被災地の今」》
地域を活性化する支援活動が求められる
樋口 務（くまもと災害ボランティア団体ネットワーク 代表理事）
- ⑭《V時評》
1.「安全」を脅かす同調者だけの空間
2.市民活動推進に人権感覚が必要なわけ
- ⑯《ドクター長浜のソーシャルマネジメントの処方箋》
ソーシャル・キャピタルと地方創生
長浜 洋二（モジョコンサルティング合同会社 代表）
- ⑰《現場は語る ～コーディネート現場から》
多様化する依頼に標準ガイドラインを策定
～大学ボランティアセンター協議会の取り組み
戸谷 富江（学校法人玉田学園法人本部社会連携課 主任コーディネーター、
神戸常盤ボランティアセンター ボランティアコーディネーター）

- ⑳《言葉 歴史の中のボランタリズム》*連載再開
今後の余生、命のあらむ限り、社会政策のため没頭せんとするものである。
加藤 時次郎
- ㉑《ヴォロ'sトピック》
市民発のSDGsアクションプラン、進行中
稲場 雅紀（一般社団法人SDGs市民社会ネットワーク 業務執行理事）
- ㉒《この人に》
玉木 幸則さん
（西宮市社会福祉協議会地域生活支援課地域福祉権利擁護係 係長、
「バリバラ」コメンテーター）
- ㉓《アゴラ/シネマ/ライブラリー》
「Social Book Cafe ハチドリ舎」/
『沈没家族 劇場版』書籍紹介
- ㉔《傍聴カフェ～裁判からみえる社会》
ケースNo.12「炊き出しの殺人未遂」



じぶんの町を良くするしくみ

赤い羽根共同募金

共同募金は、地域をつくる市民を応援していきます。

例えば……



地域で、子育てのお手伝いをしたり、悩んでいるお母さん、お父さんの相談にのる活動や、



障がいのある人が、まちで幸せに暮らせるお手伝いをする活動や、



地域で、1人暮らしや寝たきりの高齢者に、栄養の整った食事を届ける活動や、



地域に住むみんなが「安心・安全」に暮らすための活動や、

■2019年度共同募金助成申請受付(2020年度事業対象)

大阪府共同募金会では、大阪府内で行う民間社会福祉事業、更生保護事業、その他社会福祉を目的とする事業を行う法人・団体に対する助成申請を受け付けます。

・申請書受付期間＝2019年5月1日(水)～20日(月)まで

■2019年度河原林富美福祉基金助成申請受付(2019年度事業対象)

大阪府共同募金会では、河原林富美福祉基金により、社会福祉推進事業の支援でこれまであまり手を差し伸べていなかった福祉の狭間の事業や福祉の周辺領域で支援を要する事業に対する助成申請を受け付けます。

・申請書受付期間＝2019年5月31日(金)まで

一定条件が必要ですので、詳しくは、
大阪府共同募金会ホームページ
<http://www.akaihane-osaka.or.jp>
をご覧ください。

赤い羽根おおさが

検索

問合せ＝大阪府共同募金会

TEL:06-6762-8717 FAX:06-6762-8718

Eメール: ai-kibou@akaihane-osaka.or.jp

(件名に「助成申請について」と明記してください)

【特集】

届け市民の声 政治と市民活動 最前線

亥年は政治が動く、という。12年に一度の、統一地方選挙と参議院選挙が重なる年だからだ。
市民団体や活動の担い手として、政治とどう関わるか。望ましい政策作りのために、何をすべきか。
市民の声が生きる政治と政策に、市民活動が果たす役割は大きい。

【特集チーム】

早瀬 昇、阿部 太極、磯辺 康子、
稲田 千紘、永井 美佳、百瀬 真友美



1998年に設立した民設民営のNPO支援センター。ソーシャルインクルージョン「誰をも排除しない社会づくり」を具現化するため、中間支援NPOとしての市民活動支援だけでなく、ジョブコーチ、ICTによるコミュニケーション支援、子ども・多文化共生、環境・公園づくりなど、多様な人々の社会参加支援も行っている。通称NPOok(えぬぼけ)。

「要望する・される」から脱却

浜松で2013年から年1回開催している「議員と語ろうNPO円卓会議」。静岡県労働者福祉基金協会の「NPOプレゼント講座」の企画の一つとして始めたものである。地域の課題解決のためにNPOが事業をすすめる中で、制度的な壁にぶつかることが多々ある。政策や施策に反映させるには、行政の担当部署と交渉するだけでなく、議会というルートもある。NPOの政策提言力を上げると同時に、議員にも多様



段ボールの円形ボード「えんたくん」を囲み議論 (2018年7月)

なNPOの姿や課題の現状を知らせたいという思いもあった。

当時は議員とのパイプがなかったので、5団体に呼びかけて企画を練った。議員とNPOの関係をつくるにあたって、「要望する・される」関係性から脱却し、NPOと議員がお互いの役割を知り、NPOが議会のパートナーとしてどう協働したらよいかを考える場を目指した。

ほぼ全会派が参加

浜松市議は5会派(当時)46人。各会派から1、2人の出席を呼びかけるために挨拶に行つて、趣旨を説明した。初めの頃は、「圧力団体だ」とか「つるし上げられる」とか警戒され、顔見せだけで帰ってしまう議員もいた。事前に参加団体を知らせたり、議会の議事録を調べて議員の話しやすいテーマを選んだり、参加のハードルを下げたりする工夫をした。15年の選挙で議員が替わつてからは、女性や新人の議員が積極的に参加するようになった。NPOとつながって情報や意見が得られるのがメリットと

のことで、ほぼ全会派から1、2人が参加する定例企画となっている。

ディスカッションは議員とNPO4、5人で、障害者、高齢者、子ども、子育て、まちづくり、防災などテーマ別に行う。耕作放棄地、公園づくり、公共交通網の整備、森林資源の活用、子どもの貧困、給食、産後ケアなど、さまざまなキーワードが飛び交う中から、市政のあり方や、議員の役割、情報発信、男女共同参画といった共通課題も浮かび上がってくる。

公共政策を考える場にも

「行政と議員で何とかしてほしい」というNPO側の参加者もいたが、行政に要求して税金でやつてもらおう方法が全てではない。税金以外の資金調達や、議員以外のアプローチ方法がよい場合もある。限られた税金をどこに投資するか? 優先順位は? NPOが示せる先駆的事业モデルは? それぞれが取り組む課題を聞いて、「なるほど! それは必要だ」「それは自前でやるべきでは?」と意見するなど、みんなで公共政策を

考える場にもなっている。

初参加で「議員に何を話していいかわからなくて緊張した」という人もいるが、リピーターの中にはペーパーにまとめて関係者に配るなど工夫をこらす人も出てきて、複数会派の議員に伝わったことで制度が動くきっかけになったケースもあった。課題を施策に反映させる道筋が見えたことで、NPOの役割としての「提言」を意識するようになったのではないかと思う。

NPOの提言力を上げるには、地域課題に関心の薄い市民を説得できるだけのニーズやデータを提示し、関連制度や他自治体の事例などを説明できる力量をつけることが次のステップと考えている。

認定特定非営利活動法人
浜松NPOネットワークセンター

事務局長 小林芽里

東京都出身。学生時代に自然保護やまちづくりの活動で、市や県へのロビイング、議会傍聴、直接請求、自然の権利訴訟など、議会・制度へのアプローチを実地で学ぶ。青年海外協力隊での南米生活を経て、2002年より浜松NPOネットワークセンターで多文化共生事業ほかを担当。

市民による政策実現

松原明氏（談）

主役は当事者、政治のメカニズムを 知り参加と協力で働きかける

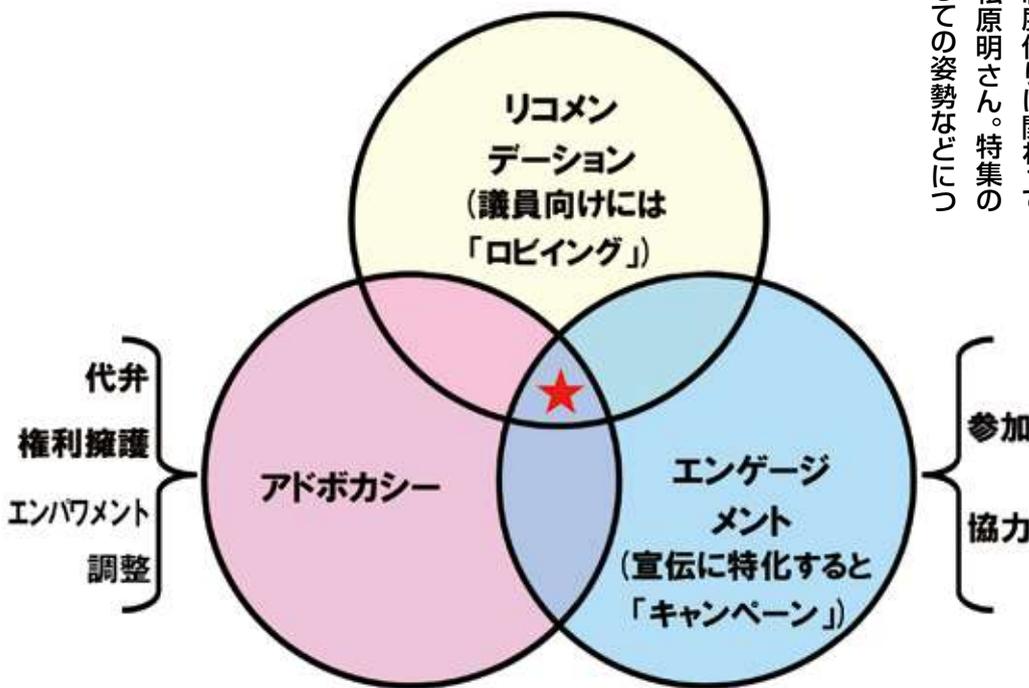
NPO法の立法、寄付税制の改革など、市民活動分野で制度作りに関わってきた、シーズ市民活動を支える制度をつくる会理事の松原明さん。特集の最後に、市民活動と政治・政策作りの関わり方や市民としての姿勢などについて聞いた。

政策実現の3本柱

市民による政策実現に向けた関わりは、図1のように三つの円で整理するのが大切だ。

一つはリコメンデーション。この場合は「政策提言」という意味だ。政治家や官僚に政策の採用を働きかける活動を指す。ロビイングとは、この一部で、政治家に対して行うものだ。もう一つはアドボカシー。代弁や弁護、擁護と訳される。政策の受益者がいて、その利益を主張すること。そしてエンゲージメント。多くのステークホルダーを関係づけ参加させていく活動だ。キャンペーンはエンゲージメントの一部となる。

【図1】 市民による政策実現の3本柱



1960年大阪生まれ。神戸大学文学部哲学科卒。広告制作会社、フリーの経営コンサルタントを経て、94年シーズ市民活動を支える制度をつくる会を設立。98年のNPO法創設、2001年の認定NPO法人制度創設、11年のNPO法改正などを推進。NPO支援制度やNPO支援機関の創設に取り組んできた。『NPO法コンメンタール』(共著、日本評論社)、『NPOがわかるQ&A』(共著、岩波書店)など著書多数。



政策を実現するためには、三つの円が重なる★の部分を究めないといけない。

ロビイングの基本は待つこと

リコメンデーションの中でも注目されがちなロビイングから説明する。これは政治家を説得すること。もともと議会のロビーで待つっていて、通りかかる議員に、わずかな時間で説得したことが語源。

実際、ロビイングの基本は待つことだ。国会議員にアポをとることは容易じゃない。私の場合、議院会館の、会いたい議員の秘書室で待っていた。だから、秘書と仲良くなり、待たせてもらえるようにならないといけない。「この人は待たせている価値がある人だ」と思わせて、1時間でも2時間でも待つ。3時間待ったこともある。待つ間は議員の地元紙を読んだり議員の読んでいる本を見たりして、議員が関心を持っているこ

ウオロ君の 気にな〜る セミナー

Vol.105 「私のトリセツ」って?



まんが ■ラッキー植松



「トリセツ」は、電器製品などに付属する、機能説明や操作手順などを記した「取扱説明書」の略語。西野カナの歌「トリセツ」(2016年)でより一般化したと思われる。

この歌は、自らの性質(特性)や生活習慣を他者に理解してもらい配慮を促すために、自らを物に模して語ったと理解できる。同様の手法を障害の理解啓発に使う動きがあり、ツールや取り組みに「私のトリセツ」「私の取扱説明書」とネーミングされることがある。代表的なのは、「コミュニケーションや自らの行動様式において周囲に違和感を与えてしまう発達障害のある人が「私のトリセツ」を作成するもので、NHKの「発達障害プロジェクト」はダウンロードして使える「わたしのトリセツ」を公開している。

「私のトリセツ」は、自らのことを他者に分かりやすく伝えるのに有効という評価がある一方で、人を物に模して「取り扱う」ことに不快感を示す意見もある。筆者の団体では知的障害の当事者から「(自分たちに対して)、取扱説明書、は、ないで」という声があり、特性の共有を兼ねたツールとして、生活設計を記す「わたしの設計図」を開発した。自らがその趣旨を認めツールとして活用したい意向があることが前提で、「トリセツ」は親しみやすい言葉だが、その取り扱いにも配慮が必要といえる。

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会
事務局長 谷川 耕一

ウオロ・バインダー、
いかがでしょうか?

ウオロ2年分(12冊)を
挟み込めるバインダー
(1冊500円+送料340円)です。
お問い合わせはウオロ編集部/office@osakavol.orgまで

「Social Book Cafe ハチドリ舎」

古 いビルの薄暗い廊下から
一歩店内に入ると、採光
豊かな空間が広がった。Social
Book Cafe ハチドリ舎は、国際
協力NGOでの勤務経験をもつ
安彦恵里香さんが、2017年7
月、広島市の平和記念公園近く
にオープンした。「自分でつくる」
をコンセプトに、煙草の臭いの染
みついた元雀荘の古物件を100
人近いボランティアの手でリノーベ
ション。クラウドファンディングや
寄付により開店資金を調達した。
イス、テーブル、本棚、コーヒー
カップなどの調度品は、店づくり

に参加しながらつながりをつくる
ため、イベントやワークショップ形
式で手作り。上映会やライブがで
きる半円形の小上がりや、土橋
公民館と称するミーティングコー
ナーも設置した。壁いっぱい描
かれたガジュマルの樹には、色とり
どりのメッセージカードが貼られ、
傍らには情報発信スペースもあ
る。食材や飲料は顔の見える県
内の生産者中心に仕入れ、オー
ガニックやフェアトレードを基本と
する。

Social Book Cafeの名の通り、
本棚にはヒロシマ、戦争、平和な

ど、社会とつながる書籍や絵本が
分類されて並ぶ。社会的課題を
考えるきっかけをつくるための勉
強会、食事会、映画など、多彩な
イベントもほぼ毎日開催。6のつ
く日には被爆者の語り部が常駐
し、小規模で親しみやすい雰囲気
のなかで交流できる。

さまざまな人たちが作り手とし
て加わりながら、平和への思いを
深め、広げていくハチドリ舎。「家
を作ることによってお互いを理解
しあう。平和が訪れるように」と
願ったフロイドシムモー(注)の思い
が、70年以上を経た今も息づいて
いるようだ。

編集委員 村岡 正司



広々とした店内



クラウドファンディングについて説明する
店主の安彦恵里香さん

Social Book Cafe ハチドリ舎

広島市中区土橋町2-43 光花ビル2階 電話082-576-4368
営業時間 水・木・金曜15:00~23:00 土・日曜、祝日11:00~24:00
(6のつく日は全曜日11時から営業) 月・火曜休
<https://hachidorisha.com/>

(注)アメリカの森林学者(1895-2001)。戦後間もない広島市で、家を失った被爆者の住宅をつくるプロジェクトを開始。寄付で資金を集め、人種や宗教を超えた日米の市民が20軒の住宅と1軒の集会所を建てた。うち1軒はシムモーハウスとして中区江波(えば)に現存する。



施設コンフリクト 対立から合意形成へのマネジメント

野村恭代
幻冬舎ルネッサンス新書、2018年7月
本体800円+税

2018年秋、東京都港区南
青山に、問題を抱えた子
どもたちを一時保護する児童
相談所などが入る「子ども家庭
総合センター」を建設する計画
が持ち上がった。

「なんで青山の一等地にそんな施設をつくらないといけないのか」と反対する住民に対し、その無理解さを批判する声が相次いでいる。

精神障害者施設などを設置する際に発生しがちな紛争(施設コンフリクト)を研究する著者(大阪市立大学大学院生活科学研究科准教授)のもとにはマスコミの取材が殺到した。ところが、野村氏いわく「私の話をきちんと紙面に載せてくれたの

は西日本新聞くらい」とがっかりしたそうである。

「偏見」「差別意識」のある住民を“上から目線”で糾弾するのではなく、「反対する人は高い関心を持っている」とむしろ評価し、「無関心の方が困る」が野村氏の見解である。「“どうでもいいや”という感じでは、その問題に関連する道義的な価値を守ろうとする動機づけも弱くなる。施設が建設される問題に対して高い関心を抱けば、その結果に示される道義的な価値、すなわち『人として行すべき正しい道』であるかが重要になり、それは本質的な部分を真剣に話し合う中で深まっていく」

本書にも、行政の担当者が、反対住民のもとに足しげく通い対話を重ねて建設に至った例が紹介されている。住民には当初、こうした施設に関する知識がないのは「当たり前」であり、一方的な「正義の押し付け」を避け、とことん話し合う。

その結果、当初は強硬に反対した住民が最終的にいちばんの理解者になった例も少なくない。施設開設後も、住民と真摯に対話する開かれた運営が求められるのは言うまでもない。

編集委員 神野 武美

～市民視点のドキュメンタリー映画を紹介する

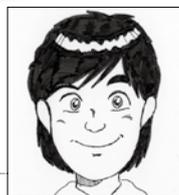
婚 外子である加納士さんは、1歳の頃から母・穂子さんのほか、呼びかけをきつかけに集まった大人たちによって共同で育てられた。2歳半になってからは東京・東中野にある3階建てのアパート（通称「沈没ハウス」）に母とともに入居し、たくさんの人たちと暮らすことになる。その後、大学生になった加納さんが自身の生まれ育った場所での生活を振り返るかたちでつくられたのが『沈没家族 劇場版』だ。

私は、タイトルから受ける印象によつてか、それとも既存のセルフ・ドキュメンタリーという映画表現への偏見からか、この映画が禁忌を暴露するような挑発的な映画ではないかと身構えていた。しかし観始めてすぐ、別の戸惑いを覚えるようになった。撮影している加納監督には、禁忌を暴露しようとするような「怒り」が無いのである。もがき苦しみながら何かを獲得しようとか壊そうとかではなく、単純に「知りたい」という欲求によつて映画を作っているのだから。そして彼の共同保育に参画した人々もまた、当時の思い出を喜々として語る。その最たる人が母親の穂子さんである。彼女はシングルマザーである自分の子育てにおいて、共同保育を選んだことは必然であり、そこに関わってくれた人々を純粋に信じている。そして息子の加納監督に与える影響も良いものであったと考えている。映画の中で唯一、共同保育を終え、八丈島に引越すことになるエピソードを語る母親は、生

きることへの焦燥感と不安に満ちている。しかしそれも、重くなりすぎることなく、触れられて終わる。そのバランスが絶妙だ。現在では、多様な家族のありかたへの理解は広まってきているように思う。それでも彼女の選択に驚く観客が多いのではないだろうか。しかし、登場人物たちの姿を見て、話を聞くと肩透かしをくらったような気にさえなってしまう。映画は監督の愛に包まれて終わりを迎える。私には子育ての正解も、映画の正解も分からないが、目の前に映る家族や登場人物をそのまま受け止めようと思つた。その先にこのような映画が生まれるならば、きっとそれは幸福なのだと思わせてくれる力がこの映画にはあるのだから。



今月の作品「沈没家族 劇場版」



●今月の館主

しまだ りゅういち
島田 隆一

イラスト：杉浦 健

監督・撮影・編集：加納士
配給：ノンデライコ
製作：おじゃやれフィルム
2018年 | 日本 | 93分
上映情報
2019年4月よりポレ
ボレ東中野（東京都
中野区）ほか全国順
次ロードショー
<http://www.chinbotsu.com/>

2012年、映画「ドコノモイケナイ」を監督。本作で2012年度日本映画監督協会新人賞受賞。その他、『いわきノート』（2014年／編集）。『桜の樹の下』（2016年／プロデューサー）。現在、日本映画大学非常勤講師。「ドキュメンタリー映画って、観るよりも作る方が数十倍面白いよ!」といつも思います。

私の市民活動 Library (第31回)



ボランティア研究 Vol.3
特集：市民セクターが挑む、社会的孤立の抑制・解消への道程

大阪ボランティア協会ボランティア研究 研究所編
大阪ボランティア協会、2018年12月
本体1200円＋税

本 誌は、2017～18年に実施された研究会「市民セクターが挑む、社会的孤立の抑制・解消への道程」の前半6回の議論をまとめたものだ。「子どもの貧困」「障害者」「高齢者」「LGBT」「児童虐待」「外国人」という各回テーマについて、「社会的孤立」を切り口に実践者と研究者が提起した内容を、当日の議論も参考に整理しなおした論稿と、モデレーターが書いた解題から構成されている。

「社会的孤立」は、みずからの意思で「一人であること」と質的に違う。集団でいるときのほうが、人は孤独を感じたり、孤立に至ったりするという屈折

した状況がある。集団の構成員は価値や規範の共有を求められるがゆえに、そこから逸脱する考えや行為、時には存在そのものが排除されることがあるからだ。六つのテーマには、日本社会がもつこの共同体主義がさまざまな形で影響している。

機能的にこの性質を支えるひとつの仕組みが、自立や福祉を家族対応に困り込んできた「家族主義」だろう。個人の自立がことさら強調される昨今、共同責任の主体である家族は、時に子どもや老人を抑圧する主体となるし、家族から逃れる人や、はじめからその外にいる人には「自己責任」が待ち受ける。そうした現状を自明視

すると、より大きな制度や社会構造が持つ原因と責任は隠されてしまう。個人の自立を是とする現代社会においては、個人も家族も容易にスケープゴートにされるのだ。

孤立解消のために見据えられる「つながり」づくりには、集団がもつそうしたアンビバレンツな性質や、社会との関係性を念頭においた議論が欠かせない。地縁や血縁ではなく価値志向的な集まりである市民セクターがもつ可能性は何か。異なるテーマを横につないだ議論を通じ、考えていただきたい。

編集委員 工藤 宏司